空性・無自性性論証の分類

——11世紀から15世紀前半までのチベット文献を中心に——

熊谷 誠慈

序論

ナーガールジュナ (Nāgārjuna, ca. 150–250) 以来、種々の方法と形式とによって、空性・無自性性の論証がなされてきた。8世紀になると、それまでに存在した代表的な無自性性論証の形式を集めてきて整理しようとする傾向が現れてくる。カマラシーラ (Kamalaśīla, ca. 740–795) はその先駆けとも言える人物であり、5つの無自性性論証を列挙している。また、アティシャ (Atiśa, Dīpaṅkaraśrījñāna, 982–1054) も、“4大因” (gtan tshigs chen po bzhi) に基づいた4つの無自性性論証を提示する論師として注目される。

インド文献中に見られる無自性性論証の分類については、すでに江島 (1980, 227–248) が詳細に解説しているので、詳しくはそちらを参照されたい。一方、チベット文献中に見られる無自性性論証の分類を体系的に扱った研究は、未だ存在しない。よって本稿では、特に11世紀から15世紀前半までのチベット文献を中心に、無自性性論証の分類を体系的に整理することを目的とする。

まず、1.において、インド文献中に見られる無自性性論証の分類を、江島 (1980) の所説を参考にしながら概説する。続いて、2.において、チベット文献中に見られる無自性性論証の分類を比較分析する。結論から言えば、チベットにおける無自性性論証の分類は、相互に共通点・相違点を保持しつつ、インドにおける分類とは異なる仕方で変化発展していくと考えられる。

1 インド文献に見られる無自性性論証の分類

江島 (1980, 238) によれば、ナーガールジュナ以来の代表的な無自性性論証を整理した人物として、最初期に位置づけられるのはカマラシーラである。カマラシーラは、MĀの中で5つの無自性性論証を列挙する。彼以後も、無自性性論証の分類がなされるが、それらは無自性性論証を4つとみなす傾向がある。以下、江島 (1980) の所説を参考にして解説する。

1.1 無自性性論証を5つとみなす伝統

カマラシーラは、MĀの中で、ナーガールジュナ以来の代表的な無自性性論証を5つ提示する。それは以下の通りである。

—空性・無自性性論証の分類—

- 論証 (一)** : 勝義として、自・他・両者からの生起と、無因からの生起を離れているものは、真実としては無自性である。例えば、空華などの如くである⁽¹⁾。
- 論証 (二)** : 存在する果も生起しない。というのも、生起は無意味だからである。存在しない[果]も[生起し]ない。というのも、兎の角等も生起することになるからである⁽²⁾。
- 論証 (三)** : 一つの因からも多くの果が生起することは不合理であるし、多[くの因]からも一[つの果]が生起することは不合理である。……多[くの因]からも多[くの果]は生起しない。……一[つの因]から一[つの果]が生起するのでもない⁽³⁾。
- 論証 (四)** : 縁起するものは、全て自性として寂靜である⁽⁴⁾。
- 論証 (五)** : 全ての事物は、一・多の自性を離れているから、無自性である⁽⁵⁾。

カマラシーラは、論証 (一) について“金剛片の如くに無碍な4つ”(rdo rje gzegs ma thogs pa med pa'i bzhi po) と呼び (MĀ, D202a6, P223a2)、また、論証 (三) について“四句生と離れていること”(mu bzhi pa'i skye ba dang bral ba nyid) と呼び (MĀ, D210b2, P232b2)、また、論証 (五) について“離一多性の理由”(gcig dang du ma'i rang bzhin dang bral ba'i gtan tshigs) と呼んでいる (MĀ, D139a7-b1, P150a8)。このことから、個々の論証に名称を与えていこうとする動きが、不完全ながらもすでに出始めていたと思われる。しかし、論証全てに明確な名称を施している形跡もないし、また無自性性論証の数を5つと確定している訳でもない。これらのことから、カマラシーラの時代においては、無自性性論証の分類はまだ原始的な段階であったと言える。各論証の名称に関して、後述するロントウン (Rong ston Shes bya kun rig, 1367-1449, Sa skya pa) は、MĀ の論証 (一) を“金剛片因”(rdo rje gzegs ma'i gtan tshigs)、論証 (二) を“破有無生因”(yod med skye 'gog gi gtan tshigs)、論証 (三) を“破四句生因”(mu bzhi skye 'gog gi gtan tshigs)、論証 (四) を“縁起因”(rten 'brel gyi gtan tshigs)、論証 (五) を“離一多因”(gcig dang du bral gyi gtan tshigs) と具体的に呼んでいる (*Rigs lam kun gsal*, 13b4-25b4)。

カマラシーラ自身は、これら5つの無自性性論証それぞれの相互関係については直接言及していないが、江島 (1980, 234-236, 243) は、カマラシーラの複数の著作を比較分析し、次のような相互関係を見て取る。

- ・ 論証 (二) (三) は、論証 (一) の傍系である。
- ・ 論証 (四) は、中観学派と唯識学派との間に展開された聖典解釈の論議と関連する。
- ・ 論証 (一) (二) (三) (四) は、存在の生起を否定することによって無自性性を論証しようとしているのに対し、論証 (五) は、認識の問題に深く関わりながら存在一般の無自性性を論証している。よって、論証 (一) (二) (三) (四) と論証 (五) は並行関係にある。

もちろん、カマラシーラ自身は、無自性性論証の数や各論証同士の相互関係について直接明言していないため、彼がそれらに関してどれほどの意識を持っていたかについては不明であ

—空性・無自性論証の分類—

る。また、後述するように、カマラシーラ以降のインドでは、無自性論証を5つと見なす伝統よりも4つと見なす伝統の方が主流であったと考えられる。

しかし、後述の如くチベット文献中では、カマラシーラの $M\bar{A}$ を典拠として無自性論証を5つとみなしている。このことから、カマラシーラ以後も $M\bar{A}$ を直接的に典拠とする5論証の伝統が存続していた可能性は否定できないと考えられる。ただし、後代のチベット文献中に見られる分類を、そのままカマラシーラの5論証に適用して解釈することは危険であるため、その取り扱いには注意が必要である。

1.2 無自性論証を4つとみなす伝統

一方、無自性論証を4つとみなすインド文献は多く存在する。その中でも、明確に4論証を提示するのはアティシャである。アティシャは、BPPの中で列挙される4論証について、BMDPの中で“4大因”(gtan tshigs chen po bzhi)と呼び、4論証の名称を全て列挙している⁽⁶⁾。それを示せば、以下の通りである。

- (1) “破四句生因”(mu bzhi skye ba 'gog pa'i gtan tshigs) : $M\bar{A}$ の論証(二)に相当
有が生起するのは不合理である。無も空華の如くである。両方の誤りとなってしまうから、[有・無の]両者も生起しない⁽⁷⁾。
- (2) “金剛片因”(rdo rje gzegs ma'i gtan tshigs) : $M\bar{A}$ の論証(一)に相当
事物は自から生起せず、他と、[自他の]両者からも[生起]せず、無因からも[生起]しない。それゆえ、本性として無自性である⁽⁸⁾。
- (3) “離一多因”(gcig dang du ma dang bral ba'i gtan tshigs) : $M\bar{A}$ の論証(五)に相当
また、一切諸法を一や多として吟味したならば、自性は認識されないから、無自性であると確定される⁽⁹⁾。
- (4) “縁起因”(rten cing 'brel par 'byung ba'i gtan tshigs) : $M\bar{A}$ の論証(四)に相当
『空七十論』の論理と『根本中論』などの中にも、[縁起するが故に]諸事物の自性は空であることが証明される、と説かれている⁽¹⁰⁾。

アティシャの“4大因”とは、 $M\bar{A}$ の5論証のうち、“破四句生因”とされる論証(三)を除いた4論証に相当する。

ここで1つの問題が生じる。というのも、アティシャが“破四句生因”と呼ぶBPPの無自性論証(1)は、内容的には“破有無生因”たる $M\bar{A}$ の論証(二)に相当するのである。逆に、カマラシーラ自身も名称に言及している“破四句生因”たる $M\bar{A}$ の論証(三)は、アティシャの“4大因”には含まれていない。すなわち、論証(三)の名称と論証(二)の内容を統合する形で1つの論証にした上で、残りの3論証を足した4論証になっている。この奇妙な統合をアティシャの誤解と解釈するか、意識的な統合と解釈するかについては現段階では決定できない。ただし、 $M\bar{A}$ の5論証が、BPPとBMDPでは4論証に変わっている点から、 $M\bar{A}$ はアティシャの“4大理由”の直接的な典拠ではなかったと考えられる。

—空性・無自性性論証の分類—

MĀ の 5 論証とアティシャの“4 大理由”との間を繋ぐ文献としては、MAS⁽¹¹⁾が存在する。MAS (D 329b6-7, P 381a2) の中では、“破四句生などの 4 つの理由という論理” (mu bzhi skye 'gog la sogs pa'i gtan tshigs bzhi yi rigs pa) という表現が見られる。すなわち、アティシャ以前に、すでに無自性性論証の数を 4 つと確定する伝統が存在していたことになる。ただし、MAS の中では残りの 3 論証の名称は挙げられておらず、それらの内容も説明されないの、MAS における“4 大理由”がアティシャのものと同じであるかどうかは分からない。

また、MRP⁽¹²⁾の中でも無自性性論証が 4 つ列挙される。それらは、MĀ の 5 論証のうち、“縁起因”たる論証 (四) を除く 4 論証に相当する。したがって、論証 (三) を欠くアティシャの 4 論証とは異なる。ただし、MRP は論証の数を 4 つと明言している訳ではないので、その著者自身が論証の数にどれだけ意識的であったかは不明である。

以上のように、アティシャ以前にも無自性性論証を 4 つとみなす伝統は存在したが、必ずしもアティシャと同一のものであるとは断言できない。

また、江島 (1980, 246) が述べるように、アティシャと同時代か少し遅れて活躍したとされる Jñānavajra の TMD の中でも“4 大理由”が取り上げられる⁽¹³⁾。それがアティシャの“4 大理由”と同一のものであるかどうかは未検討であるが、アティシャ以後も、少なくともインドでは無自性性論証を 4 つと見なす伝統が続いていたと考えられる。

1.4 小結

以上に見てきた通り、インドにおいては、まずカマラシーラが 5 つの無自性性論証を提示したが、それ以後は無自性性論証を 4 つとみなす伝統が主流になったと考えられる。ただし、それぞれの論師にとって 4 論証の内容は必ずしも同一であるとは限らないので、注意が必要である。一方、後述するように、チベットではカマラシーラの MĀ に基づき無自性性論証を 5 つと見做すのが一般的である。したがって、カマラシーラ以後も、5 論証の伝統が存続していた可能性は否定できないと考えられる。また、インドにおいて明確に行われなかった、各論証同士の相互関係についても、チベットにおいてはその分類が複雑化していくのである。

2 チベット文献に見られる無自性性論証の分類

次に、11 世紀から 15 世紀前半までのチベット文献に見られる無自性性論証の分類を扱う。まず、チベット諸論師の分類を個別に解説した後に、それらの分類を相互比較し、共通点と相違点を明確化する。結論から言えば、チベットにおける無自性性論証の分類は、相互に共通点・相違点を保持しつつ、インドにおける分類とは異なる仕方で変化発展していくと考えられる。

2.1 トルンパの分類

トルンパ (Gro lung pa Blo gros 'byung gnas, ca. 1100, bKa' gdams pa) は、*Lam rim rnam bshad* の中で無自性性論証の分類を取りあげている。該当箇所を翻訳すると、以下の通りである。

金剛片 [因] をはじめとする“5大因”が揃っていることと⁽¹⁴⁾、

ここでは、規範師カマラシーラが戲論の一切の網を否定する“5大因”を説かれたように、部分だけを区分することで設定しよう⁽¹⁵⁾。

[論証因が] 5つこそ設定された意味も、[1] 諸事物の自性 [の点から吟味する仕方] と、[2] 因・果の点から吟味する仕方の2つに関して、[1] 1番目 (=諸事物の自性の点から吟味する仕方) には、他者の否定によって否定する“能遍の非認識”という論証式である**離一多 [因]** と、他者の証明によって否定する“矛盾項に遍充されるものの認識”という論証式である**縁起因**の2つがある。[2] 2番目 (=因・果の点から吟味する仕方) には、因を吟味する**金剛片 [因]** と、果を吟味する**破有無生 [因]** と、因・果の両方を吟味する**破四句生 [因]** の3つがあり、[これら3つの論証因は] “能遍の非認識”なのである⁽¹⁶⁾。

以上の翻訳から分かるように、トルンパは“5大因”全てを肯定的に捉え、その根拠をカマラシーラに帰している。カマラシーラが無自性性論証を5つ挙げているのは $M\bar{A}$ のみであるから、典拠は $M\bar{A}$ であろう。

また、トルンパは“5大因”を [1] 離一多因・縁起因と、[2] 金剛片因・破有無生因・破四句生因との2グループに分けている。前者は、諸事物の自性の点から吟味するものとされ、後者は、因・果の点から吟味するものとされている。

さらに、論証式の種類の相違により、[1] 離一多因・金剛片因・破有無生因・破四句生因と、[2] 縁起因との2グループに分かれている。すなわち、前者は、他者の否定によって否定する“能遍の非認識”という論証式とされ、後者は、他者の証明によって否定する“矛盾項に遍充されるものの認識”という論証式とされている。トルンパの分類を図式化すれば、以下の通りである。

● トルンパ *Lam rim rnam bshad* の分類 (a) :

離一多因・縁起因…諸事物の自性の点から吟味する論証形式

金剛片因・破有無生因・破四句生因…因・果の点から吟味する論証形式

● トルンパ *Lam rim rnam bshad* の分類 (b) :

離一多因・金剛片因・破有無生因・破四句生因… “能遍の非認識” という論証式

縁起因… “矛盾項に遍充されるものの認識” という論証式

2.2 ツォンカパの分類

ツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357–1419, dGe lugs pa) は、*Drang nges* や *Legs bshad gser phreng* の中でカマラシーラの 5 論証を取りあげている。該当箇所を翻訳すると、以下の通りである。

☆ *Drang nges* における該当部の翻訳

『中観明』の中では、**金剛片【因】**と**破有無生【因】**と**破四句生【因】**と**離一多【因】**も説かれている。また、**縁起因**も説かれていて、それ (=縁起因) は“矛盾項を認識する理由”である⁽¹⁷⁾。

これら [の論理] も、守護者ナーガールジュナに追隨する論理の大道であって、論理についての広大な知を望む者は、[それらの論理を] 学ぶべきである⁽¹⁸⁾。

☆ *Legs bshad gser phreng* における該当部の翻訳

どのような論理によってかということ、[1] 自性を吟味した後否定するところの、一・多の自性と離れているから、という [論理] (=離一多因) など によって、また、[2] 因を吟味する**金剛片**と、果を吟味する**破四句生**などの論証 [によって] であって、[以上の] 諸々の理由によってなのである⁽¹⁹⁾。

まず、上記の翻訳に見られる通り、*Drang nges* においてツォンカパは、カマラシーラの MĀ を典拠として“5 大因”を提示し、縁起因を他の 4 因と区分している。そして、その全てを肯定的に捉えている。

一方、*Legs bshad gser phreng* においてツォンカパは、無自性性論証を以下の 2 グループに分けている。

- ① 自性を吟味する“離一多因”などのグループ
- ② 因を吟味する“金剛片因”や、果を吟味する“破四句生因”などのグループ

ここで、“など”に含まれる無自性性論証は、*Drang nges* で言及された“縁起因”、並びに“破有無生因”と考えて問題ないであろう。

ツォンカパの分類を図式化すると、以下の通りである。

● ツォンカパ *Drang nges* の分類：

金剛片因・破有無生因・破四句生因・離一多因
縁起因… “矛盾項を認識する理由”

● ツォンカパ *Legs bshad gser phreng* の分類：

離一多因など…自性を吟味する論証形式
金剛片因・破四句生因など…因・果を吟味する論証形式

2.3 ロントウンの分類

ロントウンの分類の詳細については、熊谷（2007）に譲り、ここではその概略のみを解説する。

ロントウンは *Rigs lam kun gsal* において、2種の2段階の分類を統合させた3段階の分類を提示する⁽²⁰⁾。それを図示すれば、以下の通りである。

- *Rigs lam kun gsal* の分類 (a) :

[1 段階目] : 金剛片因・破有無生因・破四句生因…中観の構造⁽²¹⁾を完全には決定しない。

[2 段階目] : 離一多因 [・縁起因] …空性の意味を完全に決定する。

- *Rigs lam kun gsal* の分類 (b) :

[1 段階目] : 金剛片因・破有無生因・破四句生因・離一多因…有の増益には対治をなすが、無の損減には対治をなさない。

[2 段階目] : 縁起因…有の増益と無の損減の両方に対治をなす。

- *Rigs lam kun gsal* の分類 (c) : *Rigs lam kun gsal* の分類 (a) と分類 (b) の統合形

[1 段階目] : 金剛片因・破有無生因・破四句生因

[2 段階目] : 離一多因

[3 段階目] : 縁起因

また、ロントウンは *dBu ma lta khrid I* に⁽²²⁾においても、2段階の無自性論証の分類を提示する⁽²³⁾。それを図示すれば、以下の通りである。

- *dBu ma lta khrid I* における分類 :

[1 段階目] : 金剛片因・離一多因・破有無生因・破四句生因…有の増益の極端を断ち切る。

[2 段階目] : 縁起因…有・無の両者の戯論を断ち切る。

ロントウンの分類は、トルンパやツォンカパの分類と比べると異質である。

2グループに分ける分類法を2種用いるという点では、3人とも共通している。しかし、その分類の基準は異なっている。すなわち、縁起因と離一多因を他の3因と区別する分類については、トルンパやツォンカパは自性を吟味する論証か因果を吟味する論証かによって区別していたが、ロントウンは空性の意味を決定するか否かで区別している⁽²⁴⁾。一方、縁起因を他の4因と区別する分類については、トルンパやツォンカパは論証式の種類に基づいて区別していたが、ロントウンは無の損減に対治をなすか否かで区別している⁽²⁵⁾。

——空性・無自性性論証の分類——

また、トルンパやツォンカパは各論証同士に優劣を付けていなかったが、ロントウンは優劣を付けている。この形式はケードゥブジェ (mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385-1483, dGe lugs pa) にも採用される。

さらに、ロントウンは両分類を統合した3段階の分類を提示するという点でも、トルンパやツォンカパとは異なる。

すなわち、ロントウンあたりの時代は、それまでに存在していた分類が変化発展していく過程にあったと言える。

2.4 ケードゥブジェの分類

ツォンカパの弟子であるケードゥブジェも、*sTong thun chen mo* の中で5つの無自性性論証を取り上げている。まず、離一多因⁽²⁶⁾、金剛片因⁽²⁷⁾、破四句生因⁽²⁸⁾、破有無生因⁽²⁹⁾については自立派の論証形式とみなしている。また、縁起因については、自立派と帰謬派に共通する論証形式とみなしており⁽³⁰⁾、他の4つの論証形式よりも上位に位置付けていたと考えられる。ただし、それ以上に込み入った区分は行っていない。

ケードゥブジェの分類を図式化すると、以下の通りである。

- ケードゥブジェ *sTong thun chen mo* の分類：

- 1 段階目：離一多因・金剛片因・破四句生因・破有無生因…自立派の論証形式
- 2 段階目：縁起因…自立派と帰謬派に共通の論証形式

(1) チベット文献における無自性性論証の分類の共通点・相違点

以上の考察から、11世紀から15世紀前半までのチベット文献における無自性性論証の分類には、一般的に以下の2つの共通点が見られることが分かる。

[1] まず、カマラシーラの MĀ を典拠とし、無自性性論証として以下の5つを数える。

- ① 縁起因 (rten 'brel gyi gtan tshigs)
- ② 離一多因 (gcig dang du bral gyi gtan tshigs)
- ③ 金剛片因 (rdo rje gzegs ma'i gtan tshigs)
- ④ 破有無生因 (yod med skye 'gog gi gtan tshigs)
- ⑤ 破四句生因 (mu bzhi skye 'gog gi gtan tshigs)

[2] さらに、以下の2つの分類が基盤となっている。

- 分類 (A)

- ①縁起因・②離一多因
- ③金剛片因・④破有無生因・⑤破四句生因

- 分類 (B)

—空性・無自性論証の分類—

①縁起因

②離一多因・③金剛片因・④破有無生因・⑤破四句生因

◎ 分類 (A) に相当するもの：

トルンパ *Lam rim rnam bshad* の分類 (a)ツオンカパ *Legs bshad gser phreng* の分類ロントウン *Rigs lam kun gsal* の分類 (a)

◎ 分類 (B) に相当するもの：

トルンパ *Lam rim rnam bshad* の分類 (b)ツオンカパ *Drang nges* の分類ロントウン *Rigs lam kun gsal* の分類 (b)ロントウン *dBu ma lta khrid I* の分類ケードウブジェ *sTong thun chen mo* の分類

ロントウンの時代あたりから、上記の2つの共通点を保持しつつも、無自性論証の分類は変化発展していく。そこには、すでに見てきたように2つの相違点が介在する。

- [1] まず、分類の基準について、トルンパやツオンカパのものと、ロントウンのものとは異なっている。すなわち、分類 (A) に関して、トルンパやツオンカパは自性を吟味する論証か因・果を吟味する論証かによって区別していたが、ロントウンは空性の意味を決定するか否かで区別していた。一方、分類 (B) に関しては、トルンパやツオンカパは論証式の種類に基づいて区別していたが、ロントウンは無の損滅に対治をなすか否かで区別していた。
- [2] また、トルンパやツオンカパは個々の論証間に優劣をつけていなかったが、ロントウンの時代あたりからは優劣をつける動きが起こる。さらに、ロントウンの *Rigs lam kun gsal* の分類 (c) の如く、両分類が統合し変化発展する動きも出始める。

結論

本稿の考察をまとめると、以下の通りである。

- [1] インドでは、まずカマラシーラが $M\bar{A}$ で5つの無自性論証を提示したが、それ以後は無自性論証を4つとみなす伝統が主流であった。ただし、全ての論師が同種の4論証を提示するのではなく、論師によって異なる論証を提示していることには注意が必要である。一方、チベットではカマラシーラの $M\bar{A}$ に基づいた5論証の伝統が主流である。したがって、カマラシーラ以降、トルンパが $M\bar{A}$ を典拠とした“5大因”を提示するまでの間にも、5論証の伝統が存在していた可能性は否定できないと考えられるが、その

—空性・無自性性論証の分類—

伝統がどう受け継がれていったかについては不明である。また、インドで主流であった4論証の伝統がチベットで主流たりえなかった理由についても現段階では不明である。

- [2] 一般的に、インド文献では無自性性論証は並列に扱われ、個々の論証同士の相互関係については明確な分類がほとんど行われぬ。一方、チベット文献においては無自性性論証の分類が明確になされる。一般的には2種の分類が存在する。すなわち、縁起因・離一多因を他の3因と区別する“分類(A)”と、縁起因を他の4因と区別する“分類(B)”である。
- [3] チベットにおいても、ロントウンの時代あたりから無自性性論証の分類に変化が起こり始める。まず、ロントウンはそれまでの分類の基準とは異なった基準を提示する。また、個別の論証間に優劣をつけたり、両分類を統合した発展形を提示したりする動きが出始める。
- [4] 11世紀から15世紀前半までのチベットにおいては、無自性性論証を5つとみなし、2種の分類を基盤とするという2つの共通性が保持されながらも、無自性性論証の分類が変化発展していったと考えられる。

本稿では、インド文献における無自性性論証の分類、並びに、11世紀から15世紀前半までのチベット文献における無自性性論証の分類について考察した。そして、大まかではあるが、インドやチベットにおける無自性性論証の分類の発展過程を示し得た。ただし、現時点では資料的証拠の不足により、それらの分類の伝承の違いを明示するにとどまり、それらの違いが生じた理由やその思想史的意義に関しては答えを出すに至っていない。今後は、15世紀半ば以降のチベット文献を中心に、未参照の文献中に見られる無自性性論証の分類を分析しながら、残る問題点を解決していく必要がある。

略号表

sTong thun chen mo mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po (1385–1438). *Zab mo stong pa nyid kyi de kho na nyid rab tu gsal bar byed pa'i bstan bcos sKal bzang mig 'byed*. H: ツルティム (2001). fols. 1–106b (pp. 460–531); ツルティム (2003). fols. 106a–235a (pp. 494–580). K: rJe yab sras gsum gsung 'bum. Vol. 27. *Collected Works of Lord mKhas-grub-rje dge-legs-dpal-bzang-po*. Vol. 1. Dharmasala, 1998. fols. 1–179a (pp. 127–483).

Drang nges Tsong kha ba Blo bzang grags pa (1357–1419). *Drang ba dang nges pa'i don rnam par phyed ba'i bstan bcos Legs bshad snying po. The Collected Works (gSung 'bum) of rJe Tsong-kha-pa, Reproduced from an Example of the Old Bkra-shis-lhun-po Redaction from the Library of Klu-'khyil Monastery of Ladakh*, by Ngawang ngelek Demo. Vol. 21. New Delhi, 1979. fols. Pha 1–119a; P6142. 86a–188a.

dBu ma lta khrid I Rong ston Shes bya kun rig (1367–1449). *dBu ma'i lta khrid Zab don snying por dril ba (dBu ma'i lta khrid Zab don gnad kyi zla zer)*. Dehradun, 1985, fols. 2a3–8a (pp. 141–153).

—空性・無自性論証の分類—

- dBu ma lta khrid II* Rong ston Shes bya kun rig (1367–1449). *dBu ma'i lta khrid kyi bsod don snying po'i gsal byed*. Dehradun, 1985. fols. 1-2a3 (pp. 140–141).
- Rigs lam kun gsal* Rong ston Shes bya kun rig (1367–1449). *dBu ma rigs pa'i tshogs kyi dka' ba'i gnad bstan pa Rigs lam kun gsal*. Dehradun, 1985. fols. 1–69a (pp.1–137).
- Lam rim rnam bshad* Gro lung pa Blo gros 'byung gnas (ca. 1100). *bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i lam gyi rim pa rnam par bshad pa*, cha gnyis pa, bcug pa snga ba. ACIP. SE0070–2.
- Legs bshad gser phreng* Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357–1419). *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa Legs bshad gser gyi phreng ba*. P6150.
- BMDP Atiśa. *Bodhimārgadīpapañjikā*. *Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa*. D3948; P5344.
- BPP Atiśa. *Bodhipathapradīpa*. *Byang chub lam gyi sgron ma*. D3947, 4465; P5343, 5378.
- D Tibetan tripiṭaka. sDe dge edition.
- H IHa sa edition.
- K bKra shis lhun po edition.
- MAS Bhāviveka. *Madhyamakārthasaṃgraha*. *dBu ma'i don bsod pa*. Tib. ed. 江島 (1980, 18–23); D3857; P5258.
- MĀ Kamalaśīla. *Madhyamakāloka*. D3887; P5287.
- MHK Bhāviveka. *Madhyamakahrdayakārikā*. D3855; P5255.
- MRP Bhavya. *Madhyamakaratnapradīpa*. *dBu ma rin po che'i sgrom ma*. D3854; P5254.
- P Tibetan tripiṭaka. Peking edition.
- TMD Jñānavajra. *Tattvamārgadarśana*. D3715; P 4538.

文献表

江島 恵教

1980 『中観思想の展開——Bhāvaviveka 研究』春秋社。

小林 守

2001 『チベット中観思想史の研究』(2001年に東北大学に提出された博士論文、未出版)。

—空性・無自性論証の分類—

KUMAGAI Seiji

2007 “La Classification des Cinq Démonstrations de la Vacuité (śūnyatā) par Roñ ston.” *Journal of Indian and Buddhist Studies*. 55-3, pp. 1140-1143.

宮崎 泉

2005 「アティシャの論理学に対する立場」『哲学研究』、vol. 580、pp. 15-37。

ツルティムケサン

2001 『ツオンカパ中観哲学の研究 III』文栄堂。

2003 『ツオンカパ中観哲学の研究 IV』文栄堂。

山口 益

1972 「中観派における中観説の綱要書」『山口益仏教学文集』上、春秋社、pp. 249-318。

注

- (1) MĀ (D 190a3, P 208a6-7) : gang dag don dam par rang dang / gzhan dang / gnyi ga las skye ba dang / rgyu med pa las skye ba dang / bral ba de dag ni yang dag par na ngo bo nyid med pa yin te / dper na nam mkha'i padma la sogs pa lta bu'o //
- (2) MĀ (D 137b5-6, P 148a8) : gang yang 'bras bu yod pa yang mi skye ste / skye ba don med pa'i phyir ro // med pa yang ma yin te / ri bong gi rva la sogs pa yang skye bar thal bar 'gyur ba'i phyir ro.
- (3) MĀ (D 138a4-6, P 148b7-149a2) : gang dag rgyu gcig las kyang 'bras bu du ma skye bar rigs pa ma yin la / du ma las kyang gcig (P cig) skye bar rigs pa ma yin no // ..... du ma las kyang 'bras bu du ma mi skye ste / ..... gcig las gcig skye ba yang ma yin te /
- (4) MĀ (D 138b3, P 149a7-149a8) : rten cing 'brel par 'byung ba gang yin pa de ni ngo bo nyid kyis zhi ba'o.
- (5) MĀ (D 138b6, P 149b4) : dngos po thams cad ni gcig dang du ma'i rang bzhin dang bral ba'i phyir rang bzhin med pa'o.
- (6) BMDP (D 279a2-4, P 322a7-b1) : smras pa rigs kyi bu de lta bu'i shes rab ces bya ba de tshul ji lta bu zhig gis mngon sum du byed par 'gyur zhe na / smras pa gtan tshigs chen po bzhis shes par 'gyur ro // bzhi gang zhe na / mu bzhi skye ba 'gog pa'i gtan tshigs dang / rdo rje gzegs ma'i gtan tshigs dang / gcig dang du ma bral ba'i gtan tshigs dang / rten cing 'brel par 'byung ba'i gtan tshigs so //
- (7) BPP (D 240a5-6, P 276b5-6) : yod pa skye ba rigs min te // med pa'ang nam mkha'i me tog bzhin // nyes pa gnyis kar thal 'gyur phyir // gnyis ka dag kyang 'byung ba min //
- (8) BPP (D 240a6, P 276b6-7) : dngos po rang las mi skye zhing // gzhan dang gnyis ka las kyang min // rgyu med las min de yi phyir // ngo bo nyid kyis rang bzhin med //
- (9) BPP (D 240a6-7, P 276b7) : yang na chos rnams thams cad dag // gcig dang du mas rnam dpyad na // ngo bo nyid ni mi dmigs pas // rang bzhin med pa nyid du nges //
- (10) BPP (D 240a7, P 276b7-8) : sTong nyid bdun cu'i rigs pa dang // dBu ma rtsa ba sogs las kyang //

—空性・無自性論証の分類—

dngos po nmams kyi rang bzhin gyi // stong pa nyid ni grub bshad pa //

- (11) MAS は Bhāviveka 作とされるが、江島 (1980, 33) によれば、その著者は 8 世紀後半から 11 世紀初頭の間と比較的早い時期に存在した人物であり、MHK の著者 Bhāviveka とは別人であるとされる。
- (12) MRP は Bhavya 作とされるが、山口 (1972, 267) によれば、その著者はシャーンタラクシタ以後の人物であり、MHK の著者 Bhāviveka とは別人であるとされる。
- (13) TMD (P 160b8) : rigs pa yang gtan tshigs chen po bzhi ste /
- (14) *Lam rim rnam bshad* (348a1–2) : rdo rje gzebs ma la sogs pa'i gtan tshigs chen po lnga tshang ba dang /
- (15) *Lam rim rnam bshad* (408a3) : 'dir slob dpon Ka ma la shi las spros pa'i dra ba ma lus pa 'gog pa'i gtan tshigs chen po lnga gsungs pa ltar phyogs tsam dbye bas nam par bzhag par bya'o //
- (16) *Lam rim rnam bshad* (408a4–6) : lnga nyid du nam par bzhag pa'i don yang [1] dngos po nmams kyi rang gi ngo bo nyid dang [2] rgyu 'bras kyi sgo nas nam par dpyod pa'i tshul gnyis las brtsams nas / [1] dang po la don gzhan dgag pas 'gog pa khyab byed mi dmigs pa'i sbyor ba gcig dang du ma dang bral ba dang / don gzhan bsgrub pas 'gog pa 'gal bas khyab pa dmigs pa'i sbyor ba rten 'brel gyi gtan tshigs gnyis so // [2] gnyis pa la rgyu nam par dpyod pa rdo rje gzebs ma dang / 'bras bu nam par dpyod pa yod med skye ba dgag pa dang / rgyu 'bras gnyi ga nam par dpyod pa mu bzhi'i skye ba dgag pa gsum ste khyab par byed pa mi dmigs pa nyid do //
- (17) *Drang nges* (P 140b6–7) : *dBu ma snang ba* las ni rdo rje gzebs (P gzigs) ma dang yod med skye 'gog dang mu bzhi skye 'gog dang gcig dang du bral yang gsungs la / rten 'brel gyi gtan tshigs kyang gsungs te de ni 'gal zla dmigs pa'i rtags so //
- (18) *Drang nges* (P 141b1) : 'di dag kyang mgon po Klu sgrub kyi rjes su 'brang ba'i rigs pa'i lam chen po ste rigs pa la blo rgyas par 'dod pas bslab par bya'o //
- (19) *Legs bshad gser phreng* (P ja 23a3–4) : rigs pa gang gis she na / [1] ngo bo la dpyad nas 'gog pa gcig dang du ma'i ngo bo nyid dang bral ba'i phyir zhes bya ba la sogs pas [2] rgyu la dpyad pa rdo rje gzebs ma 'bras bu la dpyad pa mu bzhi skye 'gog la sogs pa'i tshad ma ste gtan tshigs nmams kyi so //
- (20) *Rigs lam kun gsal* (13b4–14a1) : de la yod med skye 'gog sogs gsum gyis ni skye ba la bden 'dzin gyi spros pa tsam gcod par byed kyi / bden pa spyi ldog nas bcad pa med pas dbu ma'i lus yongs su rdzogs par gtan la phab pa min la / gcig dang du bral gyis bden pa spyi ldog nas bkag pas stong pa nyid kyi don rdzogs par gtan la phab pa yin no // 'on kyang gtan tshigs bzhi kas kyang yod pa sgro 'dogs kyi gnyen po byed kyi / med pa skur 'debs kyi gnyen po byed pa min la / rten 'brel gyi rtags kyi ni gnyis ka'i gnyen po byed pas gtan tshigs gzhan las nus pa lhag pa la dgongs nas /
- (21) 田中公明氏のご指摘により、「dbu ma'i lus」という語を、筆者の責任で「中観の構造」と訳す。
- (22) 小林 (2001, 上, 111–117) が解説するように、*Rigs lam kun gsal* と *dBu ma lta khrid I* は、ともにロントウンの中観概論であり、それぞれ広本と略本の関係にある。*dBu ma lta khrid II* は *dBu ma lta khrid I* よりもさらに小本の中観概論である。
- (23) *dBu ma lta khrid* (3b3–3b6) : [1] dang po la / *Sa lu ljang ba'i mdo* las gsungs pa'i rdo rje gzebs ma'i rigs pa dang / *Lang kar gshegs pa'i mdo* las gsungs pa'i gcig du bral dang / yod med skye 'gog gi rigs pa gnyis dang / mdo gnyis ka las gsungs pa mu bzhi skye bral gyi rigs pa'o // rigs pa bzhi po 'di ni dngos smra bas rang bzhin gyis yod par sgro 'dogs pa sel bas yod pa sgro 'dogs kyi mtha' sel lo // [2] gnyis pa yod med gnyis ka'i spros pa gcod pa ni / Klu'i rgyal po ma dros pas zhus pa'i mdo las gsungs

——空性・無自性論証の分類——

brten 'brel gyi rigs pa'o // de yang rten cin 'brel par 'byung ba ste gzhan la rag lus pa yin pa'i phyir ngo bo nyid kyis grub pa ma yin pas yod pa sgro 'dogs kyi mtha' sel la / rten cing 'brel par 'byung ba ste gzhan la rag lus pa yin pa'i phyir tha snyad du med pa ma yin pas chad pa skur 'debs kyi mtha' sel lo // 'dis ni sgro skur gyi mtha' gnyis ka sel ba'i phyir rigs pa gzhan las rmad du byung bar bshad de /

- (24) トルンパ *Lam rim rnam bshad* の分類 (a)、ツオンカパ *Legs bshad gser phreng* の分類、ロントウン *Rigs lam kun gsal* の分類 (a)。
- (25) トルンパ *Lam rim rnam bshad* の分類 (b)、ツオンカパ *Drang gnes* の分類、ロントウン *Rigs lam kun gsal* の分類 (b)。
- (26) *sTong thun chen mo* (H74b6-78a4, K54a4-56b2)。
- (27) *sTong thun chen mo* (H78a4-80a3, K56b2-57b7)。
- (28) *sTong thun chen mo* (H80a3-81a1, K57b7-58b2)。
- (29) *sTong thun chen mo* (H81a1-81a5, K58b2-58b6)。
- (30) *sTong thun chen mo* (H81a5-6, K58b6) : rten 'brel gyi rigs pa ni thal 'gyur ba'i skabs su bshad par bya'o //